

令和 5 年 5 月 19 日現在

機関番号：55101

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13314

研究課題名（和文）高専生を対象とした内容言語統合型ユニットの開発と言語項目習得の測定

研究課題名（英文）Development of a content-based language teaching unit for students at the National Institute of Technology and investigation of language development

研究代表者

鈴木 章子（Suzuki, Noriko）

米子工業高等専門学校・その他部局等・准教授

研究者番号：00760539

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、高校生を対象に内容言語統合型ユニットを作成し授業実施を行った。授業では受動態の学習に焦点を当てたタスクを実施し、2つのタスクモダリティ（筆記・口頭）ごとに学習者のタスク内インタラクションを分析し、受動態の学習効果を検証した。結果として、タスクに筆記の要素を含める方が、学習者の言語面への注意が高まること、タスクの目的に既習の文法項目の定着を含める際には口頭でタスクを実施することが効果的であるとの示唆が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、検定教科書の題材の学習を深め言語学習と両立させる内容言語統合型の授業ユニットを作成・実践した。その授業実践を学会で発表することで、具体的な授業事例を示すことができた。また、受動態に焦点を当てたタスクを作成し、モダリティ別の学習過程と学習成果の違いを検討することで、学習目標によるモダリティ選択の必要性を示すことができた。具体的には、様々な言語項目に焦点を当てたい時には筆記モダリティを、特定の既習文法事項を練習し定着を図る際には口頭モダリティを選択すると効果的であろうとの示唆が得られた。

研究成果の概要（英文）：In this study, a content and language integrated unit was created, which was conducted with high school students. In the class, two types of tasks (written or oral) that focused on the learning of the passive form were implemented, and learners' task interactions and the degree of passive form learning were analyzed for each of the two task modalities. Results suggest that learners' attention to the linguistic aspect of the task may be enhanced when the task includes a written component while orally administered tasks may be more effective when the task objective includes the consolidation of previously learned grammatical items.

研究分野：英語教育

キーワード：内容中心教授法 タスク

1. 研究開始当初の背景

英語教育において、英語で考えを理解し発信する能力の育成は不可欠である。現状では、高校卒業時に話す・書く能力が CEFR の A1 レベルである生徒が大部分を占める中、コミュニケーションを支える言語知識を習得しつつ、意味のある文脈の中でその知識を使う練習が必須である。その土壌を教室内に作り出すための手法として、Content Based Instruction (CBI) や Content and Language Integrated Learning (CLIL) に代表される内容言語統合型学習の枠組みは有効である。

Content Based Instruction とは主に北米において発展した言語と内容を統合的に教える教授法である (Brinton, Snow, & Wesche, 2003)。同様に CLIL は欧州において英語が母語でない生徒に英語で他教科を教え、内容と言語両方の力を伸ばすものである (Coyle, Hood, & Marsh, 2010)。本研究では内容と言語を統合的に扱うという観点から、CBI と CLIL を同質のものとしてとらえる。現在までの第二言語習得研究により、(1) 教科内容などを用い意味のある言語のやり取りを行いながら、(2) 言語的側面に焦点を当て練習させる指導 (Form Focused Instruction, FFI) の 2 点を教室内で成立させることが効果的な外国語学習方法として広く認知されており (Lyster, 2007)、CBI/CLIL ではこの 2 点を成立させる土壌を教室に作り出すことができることから、言語学習に効果があると考えられている。こうした背景をふまえ、日本の高校や大学において CBI/CLIL の授業実践は行われてきており、事例報告も多く存在する。だが、CBI/CLIL 授業の結果、言語の学習過程と言語項目の習得にどのような影響があったのかを実証的に検証する研究は少ない。CBI/CLIL で内容を意味的に理解させながら、その内容を学習する際に必須となる言語項目に焦点を向けさせる指導法やタスクの開発が必須である。

CBI/CLIL 授業を行うにあたって授業設計の柱となるタスクについては、Task-Based Language Teaching (TBLT) 研究にて知見が積み上げられている。CBI/CLIL 研究においても、TBLT 研究の結果を応用し授業を計画することは有益であると考えられる。本研究では、CBI/CLIL の授業内で受動態の習得に焦点を当てたタスクを実施する。タスクの変数として、口頭・筆記のモダリティを含める。CBI/CLIL 授業で内容の学習をするにあたって、口頭のみで情報のやり取りを行うこともあれば筆記の要素も含めて行うこともあり、このモダリティの差が学習にどのように影響するかは検討される必要がある。モダリティを比べる先行研究において、筆記の方がタスク中の学習者の注意を言語項目に向けやすいことが言語関連エピソード (Language-related episode, LRE) の分析から明らかとなっている (Niu, 2009; Payant & Kim, 2019)。また、特定の言語項目の学習に関しても筆記タスクの方がその言語項目の使用率が高く学習効果も高い傾向が出ている (Adams, 2006; Payant & Kim, 2019; Zalbidea, 2021)。だが、実際の教室内で得られたデータを分析の対象にしている研究は少なく、今回のように CBI/CLIL 授業の内容学習と関連させたタスクを分析している研究は非常に少ない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、高等専門学校で高校生段階の学生たちの志向に合った内容による CBI/CLIL 授業を作成し実施すること、その中で受動態に焦点を当てたタスクを作成し、モダリティごとのタスクインタラクションを質的に分析すること・合わせて受動態の習得を測るテストを行うことで学習の度合いを測ることの 2 点である。については、タスク中の会話をモダリティごとに LRE の観点で分析するとともに、内容学習に関連したタスクで受動態を使用する必要のあるものを行った前後で受動態の誤答修正テストの結果に変化があるかを分析した。

3. 研究の方法

研究目的の 1 に関して、対象学生 (高専 2 年生) の興味関心に合う題材 (宇宙飛行士と宇宙エレベーターについて) をもとに 7 週にわたる CBI/CLIL のユニットを作成した。作成にあたっては、先行研究で示されるフレームワーク (カウンターバランスアプローチ, Lyster 2016; SIOP モデル, Echevarría et al., 2017) を参照し、検定教科書 (Revised Landmark English Communication ; 竹内ら, 2016) の題材の学習を追加教材で深める形で作成した。内容学習の目標は、宇宙飛行士に必要な資質について考えること、宇宙エレベーターの概要について知りその将来性について考えること、とした。また、読解資料や内容の説明に多く使用されていたことから、言語目標は、受動態が使用されている文を理解し、自らも受動態を用いて学習内容について述べるができること、と設定した。教材として、内容学習用のリーディング教材・ハンドアウト・パワーポイント資料、学習した内容を復習する形で受動態の練習ができるようなタスクを作成した。

研究目的の 2 に関して、受動態を学習するようなタスクを CBI/CLIL ユニット内で行い、タスクインタラクションの分析と 3 種類のテストの分析にて学習効果を検証した。対象者は基礎的な英語力を持つ高校 2 年生 80 名 2 クラスである。両クラスともに同様の CBI/CLIL 授業を受けたが、第 6 週の受動態の練習方法に関して、片方のクラスでは絵と単語をヒントに学習内容を口頭のみで再話し、もう片方のクラスでは口頭で再話するとともに筆記でも再話した文を八

ンドアウトに書いて練習した。この再話の際に、受動態の使用が必須となるようにタスクを設計した。この受動態練習タスクの際のペアの会話を録音して文字起こしし、言語の意味や文法についての会話を LRE として特定し、語彙 LRE (受動態に関するものとそれ以外)・文法 LRE・句読法 LRE の 3 つに分類し記述統計を検討した。また、口頭・筆記 2 つのモダリティによる受動態練習の効果、事前・事後・遅延の誤答修正テストにて測った。誤答修正テストは、Spada et al. (2014, 2015) で使用されたものを使用した。また、事後のみではあるが、口頭・筆記による絵描写テストを行い、学習者の受動態の産出能力も測った。このテストも Spada et al. (2014, 2015) で作成されたものを使用するとともに、2 つのモダリティに合わせ 2 パージョン作成する必要があったため、もう 1 つは Spada et al. (2014, 2015) と類似したものを新たに作成した。誤答修正テスト、絵描写テストとともに、繰返しのある分散分析により分析を行った。以下に今回の研究のスケジュール載せる (図 1)。

事前テスト (誤答修正)【2 週間前】
自作教材 + 検定教科書を用いた CBI/CLIL 授業の実施【第 1~5 週】
受動態を含む内容復習タスク (筆記もしくは口頭練習)【第 6 週】
事後テスト (誤答修正、口頭・筆記による絵描写テスト)【第 7 週】
遅延テスト (誤答修正)【2 か月後】

図 1 授業実施とデータ収集スケジュール

4. 研究成果

研究課題 について、高校生段階の学生に対して CBI/CLIL を趣向した授業を行うことは可能であることが示唆された。また、言語学習から内容学習の方へ比重を移すことで検定教科書の題材を生かして CBI/CLIL の授業を行うことができることも改めて確認された。今後の課題として、内容学習をより深めるための追加教材の作成方法や内容学習を行う上で必要となる言語面での足場掛けの仕方等を具体的な教材とともに蓄積していく必要がある。また、授業を受けた学生が CBI/CLIL の授業をどのように受け止めたか、アンケートやインタビューを通じて把握し、授業改善につなげることが求められる。

研究課題 に関して、学生のタスクインタラクションの分析では、筆記モダリティで練習したグループの方が、より多くの LRE を産出することが分かった。この結果は過去の研究と同様である (Niu, 2009 ; Payant & Kim, 2019)。ここから、タスクの中で言語面に学生の注意を引きたい場合は、筆記の要素をタスクに含めるとよいとの示唆が得られた。また、両グループともに、語彙 LRE を最も多く産出することが分かった。文法や句読法よりも、単語単位の項目に学生の注意が向きやすいことが分かった。また、LRE の正答率については両グループともに 8 割に近く、学生同士のインタラクション内で大方の問題が解決していた。これはユニット終了後の復習アクティビティとして行ったためでもあるが、学生同士のやり取り内での学習効果に期待が持てる結果となった。

受動態の学習に関しては、口頭グループの方がより多くの受動態に関する LRE を産出していた。これは、口頭の方が筆記よりも産出のスピードが速く、時間内により多くの受動態分の産出ができたからだと考えられる。受動態のテストの結果については、どちらのグループも誤答修正タスクにおいて事後・遅延テストの方が事前テストよりも点数が高くなったが、口頭モダリティのグループの方が筆記モダリティグループよりもより高い点を取った。また、事後に行った口頭・筆記による絵描写テストにおいても、口頭モダリティのグループの方が両方のテストにおいて高い点を取得した。以上のことから、受動態の学習という点においては、口頭モダリティで練習をする方が、効果が高いことを示唆する結果が得られた。以上の結果を踏まえ、CBI/CLIL の授業でタスクを行う際、より多くの種類の言語項目に学習者の注意を集めたければ筆記モダリティを、既習の言語項目の練習を時間内に行うことを目的とする場合は口頭モダリティを選択するとよいかもしれない。

CBI/CLIL の授業を設計する際の柱となるのは一つ一つのタスクであるため、タスクの操作でどのような学習機会が生まれるか、検証していく必要がある。本研究では、モダリティをタスク変数としたが、今後他の変数についても CBI/CLIL の授業内で検証される必要がある。

< 引用文献 >

- Adams, R. (2006). L2 tasks and orientation to form: A role for modality? *ITL – International Journal of Applied Linguistics*, 152, 7–33. doi:[10.2143/ITL.152.0.2017861](https://doi.org/10.2143/ITL.152.0.2017861).
- Brinton, D., Snow, M. A., & Wesche, M. B. (2003). *Content-based second language instruction*. University of Michigan Press ELT.
- Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and language integrated learning*. Cambridge University Press.
- Echevarría, J., Vogt, M., & Short, D. J. (2017). *Making content comprehensible for English*

learners: *The SIOP model*. Pearson.

- Lyster, R. (2007). *Learning and teaching languages through content: A counterbalanced approach* (Vol. 18). John Benjamins Publishing.
- Niu, R. (2009). Effect of task-inherent production modes on EFL learners' focus on form. *Language Awareness, 18*(3–4), 384–402. doi:[10.1080/09658410903197256](https://doi.org/10.1080/09658410903197256).
- Payant, C., & Kim, Y. (2019). Impact of task modality on collaborative dialogue among plurilingual learners: A classroom-based study. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism, 22*(5), 614–627. doi:[10.1080/13670050.2017.1292999](https://doi.org/10.1080/13670050.2017.1292999).
- Spada, N., Jessop, L., Tomita, Y., Suzuki, W., & Valeo, A. (2014). Isolated and Integrated form-focused instruction: Effects on different types of L2 knowledge. *Language Teaching Research, 18*(4), 453–473. doi:[10.1177/1362168813519883](https://doi.org/10.1177/1362168813519883).
- Spada, N., Shiu, J. L. J., & Tomita, Y. (2015). Validating an elicited imitation task as a measure of implicit knowledge: Comparisons with other validation studies. *Language Learning, 65*(3), 723–751. doi:[10.1111/lang.12129](https://doi.org/10.1111/lang.12129).
- 竹内理、水本篤、中田賀之、有元久恵、田辺尚子、Andrew J. Barke、本田勝久、Derek Ray Eberl、池田真生子、James Jarrett Hult、株式会社新興出版社啓林館編集部 (2016). 『Revised Landmark English Communication 』.新興出版社啓林館.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Suzuki Noriko	4. 巻 10
2. 論文標題 Effects of content-based instruction (CBI) on EFL secondary school learners' writing	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Immersion and Content-Based Language Education	6. 最初と最後の頁 5~32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/jicb.20006.suz	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件／うち国際学会 3件）

1. 発表者名 鈴木章子
2. 発表標題 高専生に向けた内容言語統合型授業の作成 - 学習者インタビューの分析 -
3. 学会等名 全国高等専門学校英語教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Noriko Suzuki
2. 発表標題 Secondary school EFL learners' production of language-related episodes and learning of passives in collaborative tasks in two modalities
3. 学会等名 Euro SLA 30 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Noriko Suzuki
2. 発表標題 Impact of Task Modality on the Production of Language-Related Episodes and Learning of Form
3. 学会等名 KATE The 44th ANNUAL CONVENTION - Online Conference
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Noriko Suzuki
2. 発表標題 Short-term content-based instruction in secondary education in Japan: Students' perception and their writing skills
3. 学会等名 EuroSLA 29 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Noriko Suzuki
2. 発表標題 Differential learner perception of a content-based and non-content-based class: A learning log analysis
3. 学会等名 SLRF 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Noriko Suzuki
2. 発表標題 The impact of form-focused output tasks and their modality on the production of language-related episodes among EFL secondary school students
3. 学会等名 早稲田大学英文学会・英語英文学会2019年度合同大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------